

## 講演「世界を変える・日本を変える・地方を変える」

東 郷 和 彦

本稿は、平成22年6月11日、法学会春季講演会の講演の内容を収録し、若干の修文を行ったものである。

岩本先生から大変暖かいお言葉を頂戴し、ありがとうございました。

今日ここで講演するよというお話が法学部の法学会からありました。それで何のお話をしたらよいのかと考えました。岩本先生からご紹介にあったように外務省で34年仕事をしておりましたので、外務省でやっていたころの話とか、特にその中での北方領土の話とか、日米間の密約の問題でここ半年間国内で発言してきましたので、そういう話をしてもよいかも、思いました。

けれども、せっかくこういう機会を与えていただきましたので、やはり今私が一番心の中にあること、一番私が考えていること、一番皆さんに話したいことを言うのが一番よいかと、思いました。そこで、「世界を変える・日本を変える・地方を変える」。これはたいそうな演題であります。でも、今私の心の中にある一番大事なこと、これからやらなくてはいけないと思うことを言葉にすると、演題のようになったわけです。しばらくの間ですが、よろしくお願いします。

### 日本を変える

#### 世界の中における日本

外務省をやめたのが2002年、そのあと、6年外国におりました。この間、「日本は元気がない」「日本はどこにいったんだ」という感じが、常に

ありました。これは、日本人として非常に残念でした。しかし、私がおりました、オランダ、アメリカ、アジアのいくつかの国で、いろんな話をしていますと、どうしても、日本の話は最初からはできません。

どこの話が最初にでてくるか。なんといっても中国ですね。中国の今の動きは半端なものではありません。20年、2桁以上の成長を続け、経済力をつけてきた。単なる経済力ではない。経済力・貿易力を、中国は、歴史上初めて世界中に広げてきた。昔の中国は、東アジアを中心とする世界だった。いまの中国はそうではない。今の中国は、グローバル。アフリカのエネルギー資源、中南米のエネルギー資源、それをフルに活用して国の発展を考える。それからもう一つ。国の体制をつくるにあたって、中国共産党の支配、この権力は絶対に離さない。共産党がリードして、13億の国民を豊かにしていく。富国。そしてそういう富国を実現するために、軍事力をつけていく。強兵です。富国強兵。こういう動きを20年こつこつ積み上げてきました。

中国だけではない。韓国。韓国は元気がよい。人口5000万。日本の半分以下なのですが、外国にいて見ていると、本当にアジアの中で元気がよい。プリンストンに2年いました。中国人の学生がたくさんいるというのは、これは、解ります。いまの急成長の下で、特に理工学系の優秀な中国の学生がグループで来ている。しかし、中国人の学生と同じくらい韓国人の学生は、元気がよい。これは何故なのかと思います。たぶん、韓国と言う国は、非常に大きな目的をもっている。それはいつかの時点で、北朝鮮と統一して民族として一緒になる。今の政権でも前の政権でもその根底に流れているものは同じだと思います。もう一つ。戦後の韓国の発展を見ていますと、ちょうど君たちと同じような学生が韓国を変えてきた。その「自分達が国をつくってきた」という自負、たぶんそういうようなものがあって、韓国の学生はものすごく元気がよいのだと思います。

しかし、それだけではない。インドです。インドは冷戦が終わるまで元気がなかった。私はソ連関係の仕事をしてきたので、モスクワに於けるインド大使館の活動など見てきました。立派な人達がおられたけれども、総

じて、元気がなかった。ところが、冷戦が終わってから経済体制が変わった。市場経済を基礎とする新しい経済体制となったことによって、インド人は、自分達の才能、IT分野での才能をもって世界の中心に行くと思うようになった。この前ある会議で、インド人と話をしていました。そうしたら、「自分たちインド人は、一度たりとも、中華文明がアジアの中心にいたとは思っていない」と、言っていました。なかなかの発言ですが、今のインドの発展を見ていると、そういうことを言うだけの理由があるなあと思います。

最後にアメリカ。言うまでもなく、20年前アメリカは冷戦に勝利した。帝国主義、これは、よいイメージの言葉ではありません。しかし、アメリカは新しい帝国主義といわれる様になった。それだけ、アメリカの力が圧倒的なものになったということでしょう。ところが、2001年9月11日、アルカイダの同時多発テロが起き、そのアメリカが猛烈な攻撃を受けた。そのあとイラクを攻撃し、たぶん、政治面でアメリカはやはりやりすぎた。そして、リーマンブラザーズのショックがおき、アメリカがリードしてきた世界経済でも大きな困難が生じた。今、オバマ大統領がでてきて、これからの21世紀をどうリードしていくかについて、半端でない力を集めてきている。

さて日本はどうか。スライドでイメージを描くなら、非常に小さい（資



資料1

料1)。

6年外にいと、日本はほとんど見えないくらい、陰が薄く見える。しかし、日本の力は、本当にそんなに小さいのでしょうか。本当に日本は元気が無い国なのでしょうか？そんな、馬鹿なことはありません。少し前まで、日本は素晴らしく元気な国でした。私は今日本が文明史的な転換点にあると思っています。中国だけではない。日本が今文明史的な転換点にある。ただ、その新しい方向性が、ちょっとだけ見えなくなっている。そのことによって、日本の陰が薄くなっているのではないか。

### 日本の文明史的な転換

日本の文明史的な転換とは何なのか。3回、日本は文明史的な転換をしたと思います。第1。前近代。中華の世界。確かに、中華の世界はあった。ここから日本は青銅、農工作を受け入れ、漢字、儒教、仏教、律令制を入れてきた。そして、そのなかから、風景と調和した日本の神道、古来からの神話、そういうものを集大成してきた古事記、日本書紀、万葉集、そういう日本独自の文化を作り出し、ひらがなを生み出し、源氏物語と言う当時の世界でも最高の文学を生み出した。更には、武家階級が権力をもち、天皇制を一方に残しつつ、日本の政治をしきるようになった。武家中心の社会が、鎌倉・室町、戦国時代を経て、安土桃山、そして江戸時代へと発展した。260年間、武家の集団が治める日本は、平和で、貧しいけれども、文化的に非常に発展した国になった。渡辺京二という先生が書かれた「逝きし世の面影」という本があります。これは、江戸時代日本を訪れた多くの外国人が、いかに日本に魅了されたかという、胸をうつ記録であります。260年、中華と言うアジアの大きな文明の中から、日本はそのエッセンスを引き出し、日本でしかない文明世界をつくった、これが第一の転換だと思っています。

しかし、19世紀の半ば世界は変わりました。ビクトリア女王の下で、イギリス帝国は世界の海をしきった。ヨーロッパの植民地から独立したアメリカは、南北戦争という難しい課題を乗り越え、東海岸から西海岸にフ

ロンティアを広げ、太平洋にフロンティアを広げ始めた。マッキンレー大統領の下で、アメリカは、フィリピンという、日本と中国の目と鼻の先まで、植民地を広げてきた。更に、ロシア。18世紀の初めに、ピーター大帝という巨人一人の力で、古いロシアを一挙に西欧化させ、ナポレオン戦争勝利の原動力になり、19世紀の初めには、ヨーロッパの最強国の一つになった。19世紀のロシアは、軍事力の面でも、文化の面でも最も極めて興味深い国になる一方、ひたひたと東進してきた。

そういう情勢の中で、日本はどうしたか。言うまでもなく明治維新です。明治維新によって日本がやったのは、文明開化、脱亜入欧、先進欧米諸国の一番よい物を学ぶ。学んで豊かになり、力をつける。40年、富国強兵を続け、その間に、日清・日露の国の命運をかけた戦いに勝利し、世界の一等国になりました。日露戦争で日本がロシアを破ったのを見て、当時のアジアの心ある革命家は、皆、韓国で後に伊藤博文を暗殺する事になった安重根、中国で辛亥革命をおこした孫文、トルコのケマル・アタチュルク、インドのチャンドラ・ボース、西欧帝国主義に対して戦わねばと思っていた人たちは皆、「これはすごい。新しいアジア解放のリーダーが現われた」と思った。けれども、そこから日本は、アジアの帝国主義の一員となり、アジアに於ける帝国主義国として、米英に抗して開戦するわけです。日本はこの時、大東亜共栄圏というアジア解放の理念をたて、特に戦争中の外務大臣重光葵の理念によって、大東亜共栄圏会議の開催まで行った。けれども、戦況は壊滅的となり、1945年、敗戦とともにこの理念も姿を消したわけです。

敗戦の結果、米軍が日本を占領した。そこで日本人は力を喪失したか。とんでもない。日本人は、原爆を二つ落とされ、400以上の都市が爆撃された廃墟の中から立ち上がった。日本人は、働いた。富国強兵、これはやめます。日本は、平和で行きます。富国平和。働いて、働いて、働いて、平和の中で日本を再建する。アメリカの主唱する民主主義と市場原理に立ち、文化的にもアメリカ化の流れを受け入れ、ほぼ40年の間に日本は、この目標を達成した。新幹線。トヨタ。ソニー。世界の中で、日本の新し

### III. アメリカ化を進めたが？



資料2

い製品、新しい技術が評価されるようになった。新幹線、トヨタ、ソニーに止まらない（資料2）。

クール・ジャパンというのができます。これは、日本の伝統的な文化、富士山、お茶、生け花、そういう伝統文化だけではなくて、日本の新しい生活の中に、新しい文化を見出す。一つは、すし。日本人の食生活。戦後日本人の食生活はものすごく改善された。私は外務省の仕事で世界のあちこちに行きましたが、日本ほどおいしいものが、いろいろな値段で、いろいろな場所で、手に入るところはない。日本食の象徴がすしですね。世界の主要都市で、すしのない所はないくらいひろまった。もう一つは、着るもの。日本のいろんなデザイナーもいますが、一番象徴的なのは、コスプレ。まったく新しい発想です。更に、クール・ジャパンの代表は、アニメ。さきほど、日本が見えないと言いましたが、例外があるとすれば、欧米の若い人たちの間にある、日本人気。これはほとんど例外なく、アニメからきている。

#### 日本の国家目標

さて、そういう戦後の発展は、それでよかったのでしょうか。私たちは幸せになったのでしょうか。ここで重要な問題提起をしたいと思います。私たちより少し若い世代から上の世代は、一生懸命働いた。働いて、働い

何かを失ったのではないか？



■ 1989年から？ → 冷戦・昭和終る

資料3

て、よい日本を造ろうとした。私たちの世代は、この写真で示されるような日本、新幹線とトヨタとソニーの日本を造ろうと思った。でも、結果的には、こちらの写真で示されているような日本、コンクリートの果てしない塊が無秩序に続く醜いとか言いようのない日本を造ってしまったのではないか。日本の発展の中で何か失ってしまったもの、あるいは、達成できていないものがあるのではないか。君たちに聞きたい。こういう日本でよいのでしょうか（資料3）。

おおざっぱにいて、こういう無秩序な建設が大幅に進んだのは、実は、1989年、冷戦が終わり、昭和が終わり、世界史が大きく転換したそのあとの20年でありました。平成の20年の漂流です。ここに、丁度発売されたばかりの、「文芸春秋」があります。藤原正彦氏が、「日本国民に告ぐ」という論文を書いておられる。すごく、私と共鳴する点があります。私と少し考えが違っている面もある。けれども、戦後の日本が何か重要なものを失ってしまったという点で、完全に共鳴するものがあります。アレックス・カーというアメリカ人の評論家があります。2000年の初めに「犬と鬼」という本を出版しました。是非読んでください。読むと、「外国人にここまで言われるのか」と思うかもしれません。私も最後まで読むのがつらくなる。でも、彼は、「あなたがた日本人が造ったのは、こういう醜い日本ですよ。これが本当に、あなたがたが創りたかった日本なのです

か」と問いかけているのです。

私のような世代の人間が、平成に生まれた君たちに言うのは申し訳ないと思います。平成になってから、特に日本が失ったものがある。君たちが生まれた後になって、失ったものがある。その責任は君たちにはありません。しかし、私はこの失しなったものをとりもどさねばならないと思っています。そのために、できるだけことはしたい。けれども、君たちにもやっていたかねばならないことになります。

そこで今本当に考えなくてはいけないのは、平成の国家目標です。藤原先生の論述はとてもよいのだけれど、具体的な目標まで言うておられない。私は、それは、「クール日本」から「新しい日本化へ」だと思えます。それは何かと言うと、日本の中にある一番よいものを、今こそ日本の中に造りなおすことです。それは、何なのか。自然。1945年、日本は、戦争で負けた。国土は廃塵となった。その廃塵の中で、私たちが失っていなかったものがある。それは日本の山河。山と河。湖。海。「国破れて山河あり」、という有名な中国の詩があります。日本の山河の中から、いずれ新しい日本を再興できるのではないかと、その当時の人たちは思った。また、日本に残っていた伝統があった。江戸時代、明治維新、それ以来残して来た日本人の生活、風景、伝統、そういうものがあった。「新しい日本化」は、戦後のアメリカ化の後に、そういう日本の最もよいものを再興してみようという試みです。

それを実現するために、もう一つ、絶対に必要なことがあります。それは、戦後日本発展の原動力となってきた技術を更に発展させること。伝統を現在の日本に再興するために絶対に必要なのが、技術。そういうことをなしとげていくためには、心と精神がなくてはならない。心の再興が必要になる。

そういうことを視覚的に示すために、2枚の写真をお見せします。1枚は、福井県の農村です。この家並には、ある種の調和があります。どの家も白い壁に黒い格子がはまってできている。この集落に人が住む。夕暮れになる。家に明かりがつく。これは、生活そのものです。その生活の風景



## 平成の国家目標

- 「クール日本」から「新しい日本化」へ
- 日本の一番よいものを再興する
- 自然・伝統・技術・心と精神
- 「一生に一回住んでみたい国」



資料4

に、家並みと山河の間に調和がある。この集落では、それぞれの家を作る時に、皆、村全体の風景を考える。自分の住んでいる村の共同体としての風景を考える。みんなで、ちょっとナイスなものを造ろうという共通の意識がなかったら、こういう村は造れない。もう1枚は、そういう風景を引っ張っていく力。これは愛知万博の時に展示された、トランペットを吹くロボットです。つまり、技術です。この技術が伝統と自然を支えるような国をつくる（資料4）。

結論として、最高の知能を持った人であれ、熟練労働者であれ、単純労働者であれ、多くの外国人が、一生に一度でよいから行ってみたい、しばらくの間でよいから、住んでみたいと思うような国をつくれないうか。それが、私の提起したい、国の目標です。

## 世界を変える

### 世界問題とは何か

今までお話したことは、私の専門外のことで、最近国際会議などで、私はこういう話を少しずつし始めています。時々聞かれます。あなたは、ものすごく内向きなのではないか。最近の日本人は、皆内向きの話しかないのではないか。世界には、重要な話がいっぱいあるのではないか。な

ぜ、そういうことについて、話をしないのですかと聞かれます。

確かに、日本にとっても、世界にとっても、大切な話は、たくさんあります。まず、中国の台頭。さきほどお話しました。これは、日本にとっても、世界にとっても、大問題。今の中国は、東アジアの中国ではなくて、グローバルな中国。国内においては共産党が強力な力を維持し、大変な矛盾をかかえこみながらも、富国強兵によって国力を拡大しようとしている。けれども、強兵となれば、周りの国、世界中の国が、中国の軍事力がどこまでいくのかわからないと考える。こういう問題について、なぜもっと真剣に考え、発言しないのか。確かにそういう問題があります。

次にアメリカ。帝国としてのアメリカはどうなった。オバマがでてきた。しかし、今後アメリカはどうするのか。政治にしても経済にしても、国内の様々な勢力に対し、どういうアメリカ社会のビジョンを創るのか。中東からアジアに至る様々な外交問題にどのようなリーダーシップをとるのか。日本として、何をやり、何を要求するのか。確かにそういう問題があります。

決して、アメリカと中国との問題だけではありません。経済の持続可能性という問題がある。これは、本当に大変な話です。経済発展というのは、開発をして発展すればよいと思われていた。けれども、今の世界はもはやそういうことはない。環境・温暖化の問題があります。環境問題にきちんと対応しないと今後の経済発展が維持可能でなくなる。温暖化がよい例ですね。それからエネルギー。炭化水素エネルギーというものは、いずれ枯渇していく。そういうものに依存し続けると、いずれ快適な生活はできなくなる。水の問題もあります。水は有限な資源。海水の真水化というのは実現するのか。技術はどこから持ってくるのか。中国のように、大開発をしていると、水が枯渇し、汚染されてくる。これをどう防ぐか。人口の問題しかりです。そういう大きな問題に関して、日本は、どういう解答があるのか。確かにそういう問題があります。

それから、イスラム。およそ、現代の外交問題の中で一番難しくなった問題の一つに、イスラムとアラブの問題があります。少なくとも二つの大

問題がある。一つは、アラブ人の住むパレスチナの地に、イスラエルと言う国をつくったこと。第1次世界大戦のあとのいろいろな国際情勢の下で、パレスチナの地に、イスラエルという国ができた。しかし、イスラエルという国ができたことによって、そこから、パレスチナ人が追い出された。それから、4回も戦争をやって一定のバランスができてきたが、イスラエルと周辺諸国の対立は激しくなるばかり。もう一つは、アフガニスタン。遠因は、1979年、中東の重石として君臨していたイランのシャー体制が崩壊したこと。力の真空を感じたソ連が直後にアフガニスタンに侵攻。そこからアメリカの支援を受けて、サウディアラビア人を中心にアルカイダと言う反ソ戦闘集団が生まれた。ところが冷戦の終焉とソ連のアフガン撤兵によってアルカイダは母国サウディアラビアに帰った。そこで、第1次湾岸戦争でサウディに駐屯する米兵に遭遇することになった。イスラム教の聖地になぜ米兵が駐屯するのか。ここからアルカイダの反米テロが芽生え、10年後の「9・11」に繋がっていく。それから10年たっても、アルカイダとその支援者は力を弱めていない。

しかし、今のような話を外国人としていて、最後にでてくるのは、「日本はどうするのですか」という問いです。ところが、そういう問いがでてきた時に、その問題に対する答えだけを話していると、「あー、そうお」ということであまり議論が深まらないで、終わってしまう。なにか、通り一遍になる。そういう問いが出た時に、「日本はこう考える。なぜかという、日本はこういう国をつくろうとしている。その大本があって、そういう国にするためには、こういう対応が必要なので、こういう政策をとる」と言うと、相手の目が輝きだすのです。

### 上海フォーラムでの国際的な議論

一つ最近の例を述べます。上海フォーラムというフォーラムがあります。つい1週間ほど前の5月29日と30日、出席してきました。これは、世界から3,400人の学者、研究者、経済人、オピニオン・リーダーが集まり、今年で5年めです。参加者の4分の3くらいが中国からです。去年

知人の縁で、そこに呼ばれました。驚きました。上海のフータン大学が外国に関係のある学生を動員して、準備していました。3、400人の人を、航空賃、宿泊費を含めて招待するという贅沢なフォーラムでしたが、お金がどこからでているかという、韓国。韓国の大企業が研究財団をつくって拠出し、このフォーラムの経費は、すべてその基金で運営されていました。今年もまたどうぞというあり難いお話で、「大変ありがたいけれど、今年は忙しくてペーパー書けないです」と言ったら、「あなたが今書いているペーパーでよいです」と言うので、「でも今書いているペーパーは、日本とイスラムと言うペーパーで、このフォーラムで議論するには、あまりにも周辺的なテーマです」と言いました。そうしたら、「ペーパーがないならパワー・ポイントを創ってくれますか」というので、「それではパワー・ポイント使ってやりましょう」ということになりました。発言時間は、1人10分。7つのサブ・フォーラムがあって、私はその中の国際関係フォーラムに出席。40人くらいの参加者がいるので、1人10分というわけです。「日本の国家目標と、日米・日中関係」というテーマでやることにしました。パワー・ポイントのスライド5枚を準備しました。それぞれ写真を2枚その下に主要な言葉を入れたものです。

1枚目のスライドは、鳩山前総理の写真と普天間飛行場の写真。「去年日本はものすごく大きな変化があった。私たちも、日本は変わるかなと思った。けれど、大混乱が起きている。日本人自身、何が起きているかわからないような混乱。日米関係では、普天間基地をどうしてよいか解らないような混乱が起きている。けれども、そのところだけを見ていると、皆様もわからないでしょう。こういうことが起きている根源は、日本が3回目の文明史的な転換点にいるからです」。

2枚目のスライドは、宮城（昔の江戸城）の写真と日露戦争でバルチック艦隊に面して戦艦三笠の上で指揮をとる東郷平八郎大将の写真。「日本は中華の世界から江戸の世界をつくりました。文明開化・西欧化から日露戦争に勝つところまで行きました。しかしうまくいかなかった。戦争に負け、それまで積み上げたものを失った。そこから、経済大国・富国平和・

アメリカ化の動きがすすみ、いま「新しい日本化」が始まっています。

3枚目のスライド。このスライドは、さっき皆様にお見せした、福井県の村落とロボットのトランペットのスライドとほとんど同じです。新しい日本化はどういう方向で進むか。自然・伝統・技術、そういう日本の一番よい物を再興する。その大きな変化のために、今日本の中央と地方の政治は混乱している。これは非常に大きな課題ですが、これを乗り越えて、グローバル化の課題を乗り越えるつもりでやっている。そこで、課題ですが、英語で「日本化」というと、Japanization。これは、あまり、パンチ力がない。そこで、いろいろ考えて「新しい開かれた江戸」とやってみました。さきほどの藤原正彦さんが江戸に対して言われたことと、私の意見と非常によくにている。しかし、日本で「開かれた江戸」と言っても、あまり通じないのではないかと、国際会議で初めてやってみました。いずれにせよ、これが我々が目指している国家の大本ですと言ったあとに、では日米・日中はどうかと問いかけた。

4枚目のスライド。「こういう日本をつくりたい。そのためには、平和な環境が必要だ。そのためには、今、安全保障上でのアメリカとの協力が必要だ。」そこで、最初の写真は、米軍のパイロットと航空自衛隊のパイロットが協力している写真。2枚目の写真は、オバマ大統領。「そういう協力関係があれば、この大統領とも、国際経済問題、地球温暖化、それから、核不拡散などの問題について、創造的な対話をやっていける。」

最後に5枚目のスライド。中国です。聴衆50人くらいで、その4分の3は中国人。何を言うか。最初に上海の発展している写真。「経済発展はすごいと思っています。一緒にやっていきたいと思っています。けれども、私たちが今中国という思い浮かべるのは、2枚目の写真。ヴァリアーグという数奇な運命をたどった航空母艦です。」元ソ連の航空母艦だったこの船は、冷戦が終わった80年代にほとんどできあがっていました。けれども、ソ連の黒海艦隊に所属していた。ソ連が崩壊したときに、ウクライナとロシアが割れた。そこで、ヴァリアーグをどちらが持つかということで、ウクライナとロシアは大喧嘩した。結局ウクライナのものに

なった。ところが、ウクライナ海軍、こんな、とてつもない航空母艦など持てない。そこでこれを売ることにした。どこか買って欲しくないか。しかし、高すぎてだれも買わない。そうしたら中国が買うと言いつ出した。最初中国は、「私たちは航空母艦としてはこれを使いません。博物館や展覧会をこの上でやります」と言った。少なくともそう報道された。そうやって、この空母は、インド洋からウラジオストックに持っていかれた。ところが、最近の報道では、これが実戦に配備される。2014年と言われています。あと数年すると、この航空母艦を初めとする空母が実戦配備されて、日本の近辺にでてきます。そこで、会議場でこう言いました。「これは、私の持論なのですが、1945年以前におきたことについては、日本が謙虚であるべきだと考えています。しかし、この問題、海軍力を初めとする軍拡の話は、あなたがたが考えてください。現状変更をしているのは、中国側です。今のままではおさまりません。」

一つ補足しておきますが、私の発言で、順番は大変重要だったと思います。中国人40人を前にして、「あなた、この軍拡やっているでしょ」「私たちこれは、嫌なんです」「従って日米同盟を強化します」「軍拡をやめて、きちんと対応してください」と議論をしたら、なかなか先に話がすすみません。実は、要求している内容はさほど違わないのだけれど、相手は、話し合いのテーブルに乗ってこない。上海フォーラムでは、日本の国家像というところから話を始めたことが、成功だったと思います。会合が終わってから、まず、ロシアの人がやってきた。ロシア人は、こういう民族の精神的価値とアイデンティティのような話は解るのですね。それから、インド。インド人もピンと来る。イギリスの、バリー・ブザンという文明論の重鎮。彼は、自分の発表の中で、「これまでの世界の思考軸になっていた19世紀以降の帝国主義の軸は時代に適合しなくなったのではないか、これからのユーラシアは、19世紀以前の世界秩序にもどって考えられるのではないか」と発言した。これは、正に、江戸時代ではないかと、見解の一致にお互いにおどろきました。アメリカ人で中国のアイデンティティを研究している人。何人かの中国人。というわけで、何人もの人

と話をすることができました。

この会議に出て、「世界は待っている。世界は日本からの発信を待っている。この平成の20年の漂流に終止符をうち、日本は、こういう国になるんだ、そのために、こういうことをするんだという発信を待っている」という強い印象を持ちました。

## 地方を変える

### 観光と風景

そこで、最後の「地方を変える」に入ります。

私は、これからの国づくりのエッセンスは、外国人が「日本に行って住んでみたい」という国にすることではないかと述べてきました。「日本に行ってみよう」という人はたくさんいる。それでは、「日本に行ってみよう」という人はどのくらいいるか。直ちにものすごく減りますね。元来、日本に、どこにいけば住んでみたいという場所があるか。どこに行けば、彼らが本当に心がなごみ、癒され、知的にも満たされ、しばらく滞在してみたいと思う場所があるか。東京でしょうか。仕事は、刺激的で面白い。けれども、家族を連れて、10日でも東京に住みたいと思うか。そういう人にあつたことはありません。

しかし、そういう「住んでみたい」国にしたいと思った時に、言葉の深い意味に於ける観光は、とても大事だと思います。観光は、ホテルとか交通手段の問題ではありません。神社仏閣、歴史的建造物、彼方に見える富士山、いわばそういう、額縁に入った風景ですら、観光の中核ではありません。観光は、そこにすんでいる人々の生活そのものが、心を休める空間になっていること、生活空間が持っている魅力、それがエッセンスです。

そこで、「観光：風景を変えない」という話をしてみます。「崖の上のポニョ」の動画を紹介します。<sup>(1)</sup>なぜこの歌を紹介したか。ポニョの風景を、監督の宮崎駿さんがどこで得たかと言うと、広島県で瀬戸内海に面した鞆の浦という所なのです。これは、日本の最も美しい風景の一つとして、万葉

の時代から知られていた場所であります。大友旅人が歌った和歌が二首万葉集に残っています。

鞆の浦の 磯のむろの木 みむごとに あいみし妹は 忘れえぬやも  
——鞆の浦にある、むろの木という、そこにある非常に特徴的な樹木  
のようですが、それを見るたびに、昔それを一緒に見ていたあなたのこと  
が忘れられない。彼の好きだった人は、もうなくなっているわけです。

わぎもこが 見し鞆の浦の むろの木は 常世にあれど 見し人ぞなし  
——あなたが見ていた鞆の浦のむろの木はそこにある。でも、それを見  
ていたあなたはもういない。

これは日本人の心の中にある風景であり、日本人の心に残っている歌だ  
と思います。ところが、約10年ほど前からここに高速道路を通す計画が  
浮上しました。湾のところをうめたてて高速道路を入れるという計画が進  
行しています。住民の一部が「やめてくれ、これは日本人だけの宝ではな  
い、世界の宝なのだ」と主張した。さっき言った外国人が、どこに行きま  
すか。鞆の浦のような場所が、そのままある種の原型を残しながら、今の  
日本の技術と資金力と国民のコンセンサスで快適に生活できる空間を、風  
景に調和した形をつくったら、私は、そこに住んでみたいという人は現わ  
れると思います。けれど、ここに高速道路を割り込ませてしまったら、来  
ませんよ、誰も。だから、「やめてくれ」と、住民も主張したのです。と  
ころが、この高速道路計画を推進しているのは、鞆の浦の市であり、広島  
の県である。そこで、住民側が裁判を起こした。2009年10月1日、ちょ  
うど民主党が政権をとった直後に、広島地裁で最初の判決がでた。原告勝  
訴。高速道路の建設を中止してくれという住民側が、一応勝った。しか  
し、その10日後に、市と県は控訴した。曰く「この判決は景観に配慮し  
すぎている。鞆の浦の住民のちゃんとした生活をまっとうせずに、景観配  
慮はない」。

この点については、私は、はっきりした意見を述べておきます。「それ  
では、景観をこわさずに、生活を造るという方策はないのですか。もちろ  
ん、それにはお金がかかる。住民の生活している道路は、大変細くなって



いる。しかし、それなら、景観をこわさずに、道路を作る方策を皆で考えようではないですか」。そのために、日本の地方が方針を出し、国もそれを支持してやっていく方法があるのではないかと思うのですが、そういう方向にならないのですね。私は、この話はあまりにも胸が痛かったので、2008年に日本に帰ってきたあとに、日本イコモスという民間団体があって、その団体に加入しました。この団体は、ユネスコと提携しながら、景観保護と世界遺産登録をやっている団体です。そこで、「どうしてこういうことになるのですか」と質問しました。そうしたら、「実は問題は中央ではないのです。地方なのです。地方の利権なのです」というお話が、内々ありました。なるほどと思いました。結局ここに高速道路を入れることによって、ものすごい金が落ちるのですね。ここに高速道路をつくることによって金が落ちるということを、10年前にきめたら、確かにその建設業者は譲らないでしょう。けれどもそれでよいのでしょうか。

もう少し明るい話題に行きたいと思います。「観光：風景を変える」。おわら風の盆という踊りがあります。それを見てみましょう。<sup>(2)</sup>高橋治という人の書いた「風の盆恋歌」という恋愛小説があります。外国にいたとき、本当にきれいな小説だなと思っていました。丁度君たちぐらいの学生で好きになった男女がいて、お互いにひかれています。いろいろな事が起きて、それぞれが結局別の人と結婚して20年くらいたちます。けれど、お互いに忘れられない。そうしているうちにまた会う機会ができる。そこで、1年に1回、9月の初めに富山県の八尾で風の盆の踊りをやっているのを見にいくのですね。そこで2人の関係ができてくるのですが、最後は悲劇的な形で終わるとい、悲しくも美しい物語です。

富山県に行く機会があって、その時に八尾に是非いきたいとお願いしてこの街をおとずれました。行ってみて驚きました。八尾のメインストリートがあります。おわら風の盆という群舞、笠を深くかぶって坂のうえから踊りながら降りてくる。その通りが、白い壁と茶色の木の枠でととのった実に美しい家並みできています。この家並みは、比較的最近、全部造り替えたそうです。しかし、ここは人の住んでいる通りなのです。いまの日本

として、十分快適に住む条件を皆そなえている。八尾の町の人たちは、もちろん、風の盆という踊りに誇りをもっている。けれども、踊りがあるのは、年に1回。残りの歳月は、かれらがここに住んでいる。その住んでいる街の外観が、きめの細かい色と形で調和し、統一されている。新しく生まれ変わった通りの裏には、普通の日本のなんの特徴もない通りもある。けれど、街の人たちは、街全体をつくり変えていく決意をもって、いろいろな場所を変えはじめている。なんのために、こういうことをするのか。もちろん、1年に1回外から来る観光客に対して、調和のある街にしておきたい。それはあるでしょう。しかし、もっと根本的なことは、そういう文化のあるところを創造し、そこに自分達が住んでいこうという、その心意気ですね。この感覚を日本人が持つことができるかどうかということだと思います。

その観点から考えると、やることは山のようにある。一つは、一次産業。農林漁業ですね。ここは私も専門外なのですが、日本の農業。外務省で仕事をしてきて、本当に恥ずかしい。なんで世界の中で日本の農業が、日本の保守性の象徴として、あれだけ叩かれなくてはいけないのか。なにかおかしいのです。国敗れて山河あり。私が言っているような日本の風土、私たちが一番大事なものとして受け継いできたものの中に、日本の風景があり、日本の農業があることは、疑いようがない。そこを失わないようにしているのに、なぜ、日本がWTOで保守的だと言われねばならないのか。絶対に変えなければいけない。今度民主党になった。抜本的に新しい農業政策をやるのかと思っていたら、どうも、新しいばらまきであり、国際的な説得のラインも見えてきていないように見える。

林業。日本は、中央指導で、杉林をいっぱいつくった。その結果、太古からあった自然林、これがなくなってきている。私たちが求めているのは、画一的な杉林ではないのだと思います。人間と共生してきた、自然林、これを復興して自分達と一緒にすんでいくためには、どうしたらよいか。

日本の技術。最近がんばっている3D。3Dは、がんばらねばならな

## 農林魚業と技術



資料5

い。けれど3Dだけでよいはずがない。海底都市の写真があります。12歳の千葉県のお嬢さんが描いた絵です。「海の中で人間と魚が触れ合うための海中都市です。地上にはない、割れない海のシャボン玉に入って自由に移動できます。ドームの中は、地上と同じように人々が暮らしています」こういう夢を日本人は持ってよいと思います。もちろん、もしこれをやるのであれば、これが自然破壊にならないようにしなければいけない。太古から受け継いできた日本の自然と両立するようなものをこれからつくっていかねばならない。そういう創造的な新しい自然との共生をやるには、技術をもたねばならない（資料5）。

### 地方の時代と公の復興

しかし、そういう日本の再興を、だれがやるのか。東京がやるのか。どうもそうではない時代に入ってきたのではないか。「地方を変える」と標題に記しましたが、これは、「地方が変える」と考えねばならないのではないか。なぜ、地方から、地方が、変えるのか。これは、今日の私の話の中で申しあげたかったことのポイントの一つです。鞆の浦の例を話しました。鞆の浦をどうするか。これは、中央が決めることではなくなってきている。鞆の浦に住んでいる人たち、鞆の浦が所在する地方、あるいはそれをバックアップする世論が鍵になってくる。鞆の浦で生活している人たち

が、自分達が住んでいる場所が文明論的な意味がある。その意味に応じていきたいと考える。そのことが、自分たちの生活を最終的にはよくしていく。そういう距離感を地方で生活している人たちが持てるのか。そこにこれからすべてがかかってくるように思うのです。したがって、ものごとを決めるのは東京ではない。地方です。

最近、そういう変化を最もよく表している建築家として、隈研吾という方がいます。今日私が申しあげていることは、アレックス・カーはもとより、藤原正彦氏にしても、オリックスの宮内氏にしても、同じ方向の意見を言っている方は多いように思います。しかし、その中でも、決定的に重要なのは、隈研吾氏だと思えます。彼の一番のメッセージは、「20世紀の建築はコンクリートの建築でした。21世紀の建築はそうではありません。21世紀の建築は、紙・木・石、特にその地方からでてくる材料を使った建築です」というものです。そういう視点で本当に見事な建築を造り始めている。世界でも、ひっぱりだこです。

中国政府は、北京の古い区画を壊したあとの再開発を隈先生にたのんできた。ブータンは、風景と伝統建築に調和したホテルの設計を隈先生にたのんできた。ブータンは、人口わずかに600万の小さな国ですが、開発と伝統と風景の調和を実現した本当にユニークな国です。その指導部が、ヨーロッパの建築では足りないと考えて、隈先生に頼んできた。これは、素晴らしいことだと思います。本当に嬉しいです。ある意味でこれは、クール・ジャパンの延長だけれども、大きな違いは、隈先生の建築が、日本の大地にしっかりと根ざしていることです。是非先生に、日本の私たちの生活でも、私たちの住んでいる場所の空間を、どうやったら、文明の領域に達するようなものにできるのか、指導していただけたらと思います。

しかし、地方がリーダーシップをとるために、一つはっきりしていることは、中央から言ってくることを聞いているだけでは、だめだということです。けれども、地方がリーダーシップをとるということは、大変な責任をとらなうということです。鳩山政権の下で、何回も「地方主権」ということが言われました。この言葉を使うかどうかは別として、この考え方は

これからも続くと思います。しかし、これは、失敗したら大変なことになると思います。

どうしたら、成功するか。一つの鍵は、東京を見ないこと。世界のトップを、地方が見る必要がある。日本の近代化はこれまで、東京が引っ張って、地方はその東京においつくというやりかたでした。そういう時代ではなくなった。地方は、世界の一番よいものを自分の目でみる。自分の力でその一番よいものを吸収して実行する。これは、大変だと思いますが、もし地方が従来のように、東京イミテーションという形で進んでいったら、まちがいなく、地方は沈むと思います。

もう一つ、地方が、右を見て左を見て、隣近所の持っているものと同じだけのものをつくらうと思ったら、必ず失敗すると思います。右と左を見ることは、絶対に必要です。しかしそれは、どうやってその地方全体として、周辺との違いを生かしながら、分担していくかという課題だと思います。最近の言葉でいえば、道州制にちかいと思います。そういう方向で地方がやる。その方向でいけば、日本は、グローバリゼーションの中で、勝ち残っていけると思います。

そこでそういう方向で行くためにもう一つ。さっき申しあげましたが、戦後の日本の中ででてきた一つの特徴として、自分自身とその周りさえよければよいという意見があった。そこに、根本的な問題がありました。自分だけでは、足りない。周りと一緒にやっていく、公というものが必要なんだと思います。鳩山政権の最後に、「新しい公共」という概念がうちだされました。私は、決してこれに反対というわけではありません。最近の日本社会の問題の中で、確かに解決しなければいけない問題として、雇用の問題があり、年金の問題があり、医療の問題があり、教育の問題があり、そういう問題を解決していかないと、政府としての、余裕がでてこない。それは、全くそのとおりです。そういう問題を解決していく鍵として、鳩山前総理は、国民・市場・政府がばらばらでやっていたことを排し、これを「新しい公共」と概念化し、皆が皆を助け合うことを提案した。三者がそれぞれ助け合い、参画しあうことによって、日本のかかえて

いるひずみを解決し、新しい日本をひきいるヴィジョンをつくろうとし  
(3)  
た。日本の中で壊れていたものを立て直すためには、このアプローチは必要なのですが、これだけでは、足りない。必要とすることは何か。私は、こう考えます。

「私たちは、富国平和をめざしてひたすら走り続けることによって、個人の利益を追求しさえすればよしとする、戦後独特の価値感にひたってしまった。個人もしくはその延長としての家族とその所属集団を超えた、自分達の住む共同体、地域社会、更には国家をよくするために、わずかなりとも個人の欲望をがまんすることが如何に大切かという、そのずしりと重い「公」という感覚を失ってしまった。」

結局さっき言った鞆の浦。高速道路を造れば、金になる。でも、日本は、それだけですか。なにかもっと大事なものが日本人としてあるのではないですか。それは何なのですか。それを発掘するのは、中央ではなくて、地方が、自分たちの生活、自分達の家から発掘していくということになるのではないのでしょうか。

## 学生たちへのメッセージ

そこで、誰がこれからの本当の担い手になるか。私は、1945年生まれ、できるだけのことはしたいと思います。でも、私の世代の努力だけでは、そういう新しい「公」は見出せない。若い世代が、これからの探求の担い手になる他ないと思います。それは、君たちです。そこにバトンがいく。だから、がんばってほしいと思います。今日ここにきている学生の方は、それぞれ専門をもって勉強しておられると思います。それはそれで、是非やっていただきたいことです。しかし、今日ここでお話をしたことの担い手になるような、そういう人間に育っていくために、三つアドバイスを申し上げたいと思います。

第1に、歴史を勉強していただきたい。日本が世界の中で置かれている位置や、今後の方向を考えると、歴史的な経緯を知らないで、深い思考

がでてくることはありません。

第2に、世界に出て自分の目でみていただきたい。東京を見ないで、世界のトップを見る。しかし、自分の目で見なくて、どうして世界のトップが見られるでしょうか。外国に出たとき、それなりに自由に動くには、語学は必須です。中でも、英語は必須です。「英語を楽に身につける方法はないですか」と聞かれることがあります。たぶん、無いと思います。あまり難しく考えないで、一定の時間を使って、きちんと勉強して、トーフルの点をあげることです。そして、実地に使いながら、身に付けていくことです。これはけっこう大変だけれど、1回身につくと楽になります。若ければ若いときほど勉強は早いです。ある程度集中しないとだめです。だからやるのは勧めません。京都産業大学もいまいろいろの制度があります。できれば、この大学にいる間に語学を勉強して、半年なり外国の大学に行って、住んで、勉強すること。できるだけ、単位の交換ができるところで、勉強すること。旅行で行くことと、住むこととは大違いです。そうやって学生の時代から、視野を世界に持つ。ここは京都の大学です。では、京都を世界一にする。どうしたらよいか。それには、とにかくパリに行って、3ヶ月なり半年なり住んでみる。住んで見なければ、パリと京都がどちらがうか、なかなかわからないと思います。

第3に、自分の意見と哲学をもつこと。哲学というとたぶん難しそうだなと思われるかもしれませんが。私は、この言葉には非常に思い出があります。私が大学に入った時、けっこう不真面目な高校生だったので、大学では、真面目にやろうと思いました。その時偶々ある先生に出会いました。井上忠というまだ若い哲学の先生でした。この先生の授業に半年でて、本当に目から鱗が落ちる思いがしました。先生の専門は、アリストテレスとギリシアの形而上学でしたが、その先生が言っていたことは一つでした。

「他の人のいう意見、目の前に流されている意見を信じるな、自分で聞え、自分で考えろ。絶えず、『何か?』と問い続けろ」。私は、ほんとうに、ショックを受けて、大学の後半から外務省に入った研修の1年を含む3年半、西洋哲学史を、アリストテレスから現代にいたるまで、こつこつ

読みました。最後に、実存主義という当時良く読まれた思想につきあたり、カール・ヤスパースというドイツの哲学者を読み、ああ、これだと思いました。

「人間とはなんであるかという問いに対してはどんな答えも十分ではありえないことをわれわれは見てきた。なぜなら、人間が何でありうるかは、彼が人間である限り、やはり、彼の自由のなかにかくされているからである。このことは人間の自由の結果から、やはり明らかになるだろう。人間が生きている限り、自分自身でたえず努力して獲得しなければならないものがあるはずである。規定されえないものを代表しているのが、人間の品位である。人間が人間であるのは、彼が自己のうちにこの品位をもち、またすべての他人のうちにこの品位を認めているからである。きわめて簡単に、カントはこのことを言い表した。どんな人間も、人間によって手段として用いられてはならない。各人はみずから目的である」

(カール・ヤスパース「哲学の小さな学校」)

ヤスパースは、この講演をしてから、1年後、私が外務省に入って間もなく死にました。しかし、この人間の品位とその根源的な自由と責任ということは、非常に強い印象を私に残したと思います。さて、皆さん、おそらくは初めてヤスパースの言葉を聞かれてどう思ったか解らないのですが、哲学の言葉は、決して、哲学書の中でのみ語られているのではありません。最近の若い人の中でよく知られている「エヴァンゲリオン」という動画があります。その最終章を見てください。<sup>(4)</sup>

「ぼくは、ぼくがきらいだ。

でも、好きになれるかもしれない。

ぼくは、ここにいてもいいのかもしれない。

そうだ、ぼくは、ぼくでしかない。



ぼくは、ぼくだ。

ぼくで、いたい。

ぼくは、ここにいたい。

ぼくは、ここにいてもいいんだ」

私は、この最終章を何回となく見ました。私には、ちょうど君たちの年のころ読んだ、ヤスパースと同じメッセージを出しているように思われます。

これからの地方の、日本の、世界の担い手は、若い人である。

どうか、がんばってください。

これで、講演を終わります。

#### 註

- (1) YouTube「崖の上のポニョ」の主題歌を紹介。
- (2) YouTube「八尾のおわら風の盆」を紹介。
- (3) 内閣ホームページ「新しい公共」を紹介。
- (4) YouTube「エヴァンゲリオン」最終シーンを紹介。